

# きょうだいとのコミュニケーションが 幼児の社会的認知の発達に及ぼす影響

柴田利男

目次  
I. 問題  
II. 方法  
III. 結果  
IV. 考察  
引用文献

## I. 問題

子どもの社会的発達に関する研究において、これまでの研究では母子関係の重要性が論じられることが多く、きょうだい関係の研究は極めて少ない。きょうだい数や出生順位に関する研究は比較的なされておらず、長子的性格、末っ子的性格などが指摘されているが、個人差が大きく、また明確な科学的根拠を持った議論とは言いがたいものも多い。しかしながらDunn (1986) が指摘するように、きょうだい関係には相互交渉の頻度が多い、感情が抑制されていない、興味が類似する、模倣的なやり取りが多い、教育やアタッチメントが生じるなどの特徴があり、子どもの対人関係やパーソナリティに影響する可能性がきわめて高い、重要な人間関係の一つであることに疑う余地は無い。このような関係について検討するには、出生順位あるいはきょうだい数といった量的側面のみならず、関係の質的側面に関する検討が必要であろう。

依田 (1990) は、投影法による調査結果から、きょうだい関係の質的側面として、対立

関係 (相互に対立し、張り合っている関係)、調和関係 (仲のよい関係)、専制関係 (どちらか一方が優位に立っている関係)、分離関係 (積極的な交渉が認められない関係) の4つを指摘している。また飯野 (1994) も質問紙法による調査結果から、「保護・依存」「対立関係」「共存関係」「分離関係」という、依田 (1990) と同様の4因子を抽出している。依田 (1990) はこれらの4側面に関して、きょうだい関係には親子関係に似た縦の関係と、仲間関係に特徴的な横の関係の、二つの要素が混在していると述べ、きょうだい関係を、これらを合成した斜めの関係と表現している。Dunn (1986) はこれと同様のことを、相互性 (reciprocity) と相補性 (complimentarily) という概念を用いて説明している。きょうだいの場合、お互いの親密さや興味の共有、関係の情緒的強さの理解といった点で相互性を持つ一方、きょうだいの年齢差が相補性を作り出している。相互性は先の横の関係にあたるもので、相補性は縦の関係に当たると考えられる。

横の関係、つまりきょうだい間の相互性について、Pepler, Corter & Abramovitchi (1982a, 1982b) は、相互交渉の総量の27%が模倣であると報告している。模倣とは社会的学習の第1歩であり、またコミュニケーションの連続 (持続) において重要な役割を演じている。きょうだい間に共通の興味を生み出す働きも考えられる。Dunn & Kendrick

キーワード：きょうだい関係，社会的問題解決，幼児

(1982)によれば、お互いに模倣しあうきょうだいには喜びや興奮が観察される。

一方きょうだい関係の相互性が、きょうだい関係にマイナスに働くときも多い。先のPeplerら(1982a, 1982b)の研究では、相互作用総量の29%に敵対行動が見られた。Dunn & Kendrick (1982)の研究では、生後2年目で何が相手をうるさがるかを理解し、意図的に相手を悩ませることができるという。これらの行動はけんかにつながることが多い。主として、けんかは、きょうだい間の分配(必ずしも物質的なものでなく、母親の愛情なども含まれる)に関して起きる事が多いといわれている。

次に縦の関係、つまりきょうだい間の相補性についてであるが、多くの文化において年長のきょう代いは養育者として機能する。兄姉は広い意味で弟妹の世話をしていると言える。2歳以下の子でさえ弟妹の出生に興味を持ち弟妹の苦痛のサインに関心を持って助けたがる事が多くの研究から指摘されている。Stewart (1983)によれば、4歳児の52%は、ストレンジシチュエーションの実験場面で、母親から分離させられて悲しんでいる弟妹を適切に慰めることができた。この研究を弟妹側の視点から見ると、兄姉へのアタッチメント形成という面から考えることが出来る。

きょうだい関係が仲間関係を含めた他の対人関係と関連するかどうかは興味深い問題である。行動に状況の違いを超えた一貫性があるのかという問題は、社会的行動についての論争点の一つでもある(Mischel, 1984)。

Berndt & Bulleit (1985)は、6か月時にきょうだいとより複雑な対人行動をした子どもは、9か月時に仲間とのやり取りの開始を主導し、より複雑な社会的行動を示したとする研究を紹介している。Dunn & Munn (1986)は、第二子の向社会的行動について、18か月と24か月の二時点で継時的に観察し、前の時点でその兄姉が協同的だった18か

月児は、24か月時点でより多くの向社会的行動を行うことを見出しており、きょうだい関係が向社会的行動の発達に影響しうると論じている。

きょうだい関係の仲間関係への影響を考えると、ある一時点での同時的影響は必ずしも明確ではないが、きょうだいとの相互交渉の日々の積み重ねが仲間関係に影響する可能性は十分考えられる。社会的学習理論の考え方によれば、子どもは自分の周りにいる人間の行動をモデルにして自分の行動を形成していく。この場合モデルと自分の性別が同じで年齢が近いことがモデリングをより促進するという。きょう代いはこれらの条件を満たすものが多いので、弟妹の行動は兄姉の影響を受けやすいであろう。したがって、弟妹の仲間関係が、兄姉の弟妹に対する相互交渉パターンに影響を受けることは十分考えられる。

きょうだいの影響は子どもの対人行動だけにとどまらない。Light (1979)によると、きょうだいと親密な関係を持つ4歳児は役割取得能力や社会的感受性が高度に発達していた。しかし因果関係については明言されていない。Dunn (1986)によれば、きょうだい間の遊びにおいて、2歳児が4、5歳児の役割を演じるという現象が観察されている。これはきょうだい間においてのみ見られ、母子関係場面を含むその他の状況では観察されなかった。このような役割遂行には社会的ルールや自分の役割を理解する必要があり、きょうだい関係は社会的認知スキルの発達に役立つことを示唆している。

これまで述べてきたような、きょうだいの果たす役割は、他の人間関係で充足可能なのであろうか。すなわち、一人っ子的場合、何らかの発達上の不利益が考えられるのであろうか。一般的な風説では、一人っ子的社会性の乏しさが主張されることが多いが、科学的根拠のある議論とはいえない。きょうだい関係のある、なしだけに留まらず、きょうだい

関係や他の人間関係の質的側面を多面的に捉え検討する必要がある。

以上の観点から、幼児の社会的認知スキルに、きょうだい関係の質が影響を及ぼしているのかを検討することが本研究の目的である。従来の研究では、主にきょうだい構成や出生順位が検討対象とされてきた。本研究では飯野（1994）にもとづき、保護・依存関係、対立関係、共存関係といった質的側面を取り上げ、社会的認知との関連性について検討する。

田中・山根（2005）は、きょうだいの人数が、社会的問題解決能力を媒介にして、対人関係能力に影響することを示している。本研究ではこれに着目し、社会的問題解決能力の測定手続きを基盤にした、社会的認知の測定手続きを作成し使用することにした。

## II. 方法

### 1. 調査対象者

札幌市内のK幼稚園に通う年長組（5～6歳）男児15名、女児19名、年中組（4～5歳）男児11名、女児18名、計63名を対象とした。きょうだい関係に関する質問紙調査と紙芝居を用いた社会的問題解決能力の調査を面接によって行った。面接調査は2007年7月中に行われた。

### 2. 質問紙の構成

**きょうだい関係の質的側面** 飯野（1994）は調査結果にもとづき、「保護・依存関係」「対立関係」「共存関係」「分離関係」の4因子からなる“きょうだい関係スケール”を作成している。これを参考に、保護・依存関係、対立関係、共存関係に対応する項目を4項目ずつ計12項目を用意した。なお回答に当たっての幼児の負担を考え、3側面の得点が全て低い場合を分離関係とみなすことにした。

質問項目は以下の通りであった。

保護・依存関係

- ・わからないことを教えてあげた（もらった）
  - ・いつもきょうだいがついてくる（ついていく）
  - ・着替えなどを手伝った（手伝ってもらった）
  - ・お父さんお母さんの代わりに世話をした（してもらった）
- 対立関係
- ・悪口を言っていじめた（いじめられた）
  - ・口げんかをした
  - ・けんかした
  - ・いうことをきかないので怒った（怒られた）
- 共存関係
- ・一緒にテレビを見た
  - ・一緒に遊んだ
  - ・幼稚園や学校の出来事を話した
  - ・きょうだいの友達と一緒に遊んだ

**社会的認知** 仲間関係において調査対象者が被害を受ける、社会的問題解決場面を2場面用意し、紙芝居風の図版を作成した。図版は男児用と女児用を作成し、また感情測定用の表情図も用意した。

2場面は、砂場場面（「～君（ちゃん）は砂場で遊んでいました。すると突然横から知らない子に砂をかけられました。」）と、お絵かき場面（「～君（ちゃん）は自分が書いた絵を持っていましたが、その絵を床に落としてしまいました。拾おうとしたら知らない子に絵を踏まれてしまいました。」）であった。

図版を示しながら、各場面を語り聞かせ、以下の4つの質問を行った。

質問1：自己の表情予測

質問2：自己の対応予測

質問3：他者の対応予測

質問4：結果予測

回答は柴田（1998）にもとづき、以下のよう

にカテゴリー分類された。  
表情予測：怒り、悲しみ、無表情、喜び、困惑

自己対応予測：反社会的解決、向社会的解決、主張的解決、第三者介入的解決、消極的

解決、泣くなど感情表現のみの答え、わからない

他者対応予測：停止、行為の続行、第三者による叱責、逃避・回避、解決法略に対する肯定的反応、解決法略に対する否定的反応、謝罪、知らない・わからない

結果予測：関係促進的予測、自己中心的予測、悪い結果の予測、物理的変化の予期、不明

### 3. 手続き

面接はK幼稚園の一室を借りて、心理学専攻の女子学生2名と男子学生1名によって個別に行われた。十分なラポール形成の後、質問を行った。

まずきょうだいの人数およびきょうだい構成について聞いた。続いてきょうだい関係の質に関する質問を行った。きょうだいがいない場合は社会的問題解決場面に移った。

きょうだい関係の質に関する12項目については、まず「はい」か「いいえ」で回答させた後、さらに、「いつも」か「たまに」かを尋ね、4段階の評定値を記録した。

社会的問題解決場面は、場面の説明の後、質問1から4を順に質問した。2場面の提示順序は対象者ごとにランダムとした。質問1では表情図の選択とともに言語反応を記録した。質問2から4は幼児の回答をそのまま記録した。

面接に要した時間は一人約10分程度であった。

表1 きょうだい数

	0	1	2	3人以上	合計
年中	6	13	8	2	29
年長	6	18	8	2	34
合計	12	31	16	4	63

表2 きょうだい内訳

	兄		姉		弟		妹	
	1人	2人	1人	2人	1人	2人	1人	2人
年中	11	3	7	1	10	0	0	0
年長	9	2	10	1	9	0	5	1
合計	25		19		19		6	

## Ⅲ. 結 果

### 1. きょうだい関係

きょうだい数および内訳に関して学年とのクロス集計を行った。その結果を表1および表2に示す。

次にきょうだい関係の質に関して、保護・依存、対立、共存関係のそれぞれ4項目の評定値の合計を各関係得点とした。兄、姉、弟、妹がいる人それぞれにおいて、きょうだい関係得点の平均値を求め、学年に関する1要因分散分析を行った。その結果、姉がいる人において、学年間に有意差がみられた。保護・依存関係得点は年長児より年中児の方が有意に得点が高かった ( $F(1,17) = 7.08, p < .05$ )。また共存関係得点も年中児の方が有意に得点が高かった ( $F(1,17) = 6.85, p < .05$ )。弟がいる人においては、対立関係得点で学年間の有意差がみられ、年長児の方が有意に得点が高かった ( $F(1,18) = 10.83, p < .05$ )。

### 2. 幼児の社会的認知

社会的問題解決場面での各質問に対する幼児の回答カテゴリについて、学年とのクロス集計を行ったところ、全体を通して、学年間の大きな差異は見られなかった。

被害を受けたときの自分の感情を問う表情予測では、2場面とも、怒り、悲しみが多かつ

た。砂場場面では喜びという回答も見られ、砂遊びの一環と認知される場合があった。

自己対応予測では、全体を通して主張的解決が最も多かった。次いで反社会的解決と、わからないも多かった。

他者対応予測では、どちらの場面においてもわからないが最も多かったが、回答にはばらつきがみられた。否定的反応に関しては年中児より年長児の方が少ない傾向が見られる。

最終的な結果予測では、最後は仲良くなるというような、関係促進の回答が最も多かった。質問1～3でわからないと答えた子どもにおいても、この回答が多い。

### 3. きょうだい関係と社会的認知の関連性

きょうだい関係と社会的認知との関連性を検討するため対応分析（コレスポネンス分析）を用いて、各関係得点群およびきょうだい数と、社会的問題解決場面2場面における各質問の回答の対応を分析した。分析にはSPSS（14.0J）を使用した。

きょうだい関係の質に関する分析では、まず調査対象児を、「保護・依存」「対立」「共存」の3つの関係得点の、それぞれの中央値を基準に高群、低群に分類した。各関係得点が存在しない一人っ子は、独立した一人っ子群とした。きょうだい数に関する分析では、一人っ子、2人きょうだい、3人以上のきょうだいという3群に分類した。

全ての分析において、累積説明率から2次元を採用した。以下に2次元の散布図から読み取ることの出来る対応分析結果の概要を示す。

**保護・依存関係** 表情予測では、高群は悲しみを選択し、低群は怒りを選択する傾向が見られた。

自己対応予測では、高群は、主張的解決を選択し、低群は反社会的解決を選択する傾向がみられた。

他者対応予測では、砂場場面において低群

のほうが肯定的反応を示すと答える傾向が強く、お絵かき場面においては低群は謝罪に近かった。

結果予測では、低群のほうがより関係促進を選択し、高群のほうが、悪い結果になると予測する子が多かった。

**対立関係** 表情予測では、高群が悲しみを選択し、低群のほうが怒りを選択する傾向が見られた。

自己対応予測では、高群のほうが主張的解決を選択する人が多かった。

他者対応予測では、砂場場面において、高群は肯定的反応を示し、低群は否定的反応に近かった。お絵かき場面では、低群が行為の続行と近いという結果がみられた。

結果予測は高群が悪い結果に近く、低群が関係促進に近かった。

**共存関係** 表情予測においては、高群、低群での差はあまりなく、怒りと悲しみを選択する人が多かった。

自己対応予測では高群のほうが反社会的解決や主張的解決を選択し、低群のほうが消極的解決をする傾向がみられた。

他者対応予測では低群のほうが肯定的反応に近く、高群は行為の続行に近かった。

結果予測では、低群のほうが、関係促進を選択する人が多く、高群は悪い結果と回答する人が多かった。

**きょうだい数** 表情予測では、2人きょうだいが悲しみを選択する傾向が見られ、3人以上のきょうだいは、喜びに近いという結果が見られた。

自己対応予測では、3人以上のきょうだいが主張的解決に近いという結果が見られ、絵の場面では、3人きょうだいは、反社会的解決に近かった。

他者対応予測では、2人きょうだいが否定的反応や行為の続行に近く、3人以上きょうだいのいる子が停止や肯定的反応に近かった。

結果予測では、2人きょうだいが関係促進

に近く、3人以上のきょうだいの方が悪い結果に近かった。さらに、次元を2の方向から解釈すると、ほとんどすべてにおいて、3人きょうだいより、2人きょうだいの方がわからないに近いことがわかった。

**一人っ子** 対応分析のすべての結果から、一人っ子の特徴を取り出してみると、表情予測では、怒り、悲しみを選択しているものが半数くらいだが、無表情や、喜びに近いという結果も見られる。自己対応予測および他者対応予測では、回答がばらついている。結果予測では、関係促進と回答するものが多い傾向が見られる。

#### IV. 考 察

##### 1. きょうだい関係

きょうだいの内訳は、一人っ子が12人、2人きょうだいが31人、3人以上のきょうだいが20人であった。近年、少子化が進んでいるが、一人っ子の数は少なく、きょうだいがいる子が多かったという結果になった。つまり少子化に関して、子どもをまったく生まない人が増加しており、子どもを産む人は2人以上産むという現状が推測できる。

保護・依存、対立、共存それぞれの関係得点について学年差を検定したところ、姉がいる人では、年中児の方が有意に保護・依存および共存の得点が高かった。幼い子どもで姉がいるほうが、きょうだいの仲が良くなりや

すいということであろう。年長の女兒のほうが面倒見がよいからかもしれない。また、弟がいる人では、対立関係得点が年長児において有意に高かった。兄がいる人ではこのような差は見出されておらず、年長の男児から弟への一方的な行動特徴と言える。

これらの結果から、年長者から弟・妹への関わり方は、女兒の場合、年少者の依存・共存の感覚を生み出し、男児の場合、年長者本人の対立的感情を生み出しているようである。

##### 2. きょうだい関係と社会的認知の関連性

対応分析の結果にもとづき、きょうだい関係と社会的認知との関連性について考察する。なお表3は、主な結果をまとめたものである。

**保護・依存関係** 表情予測では、高群は悲しみを選択し、低群は怒りを選択する傾向が見られた。この関係得点は高いほど、きょうだい間で面倒をみたり見てもらったりしているため、被害を受けた時にも、対他的攻撃的な反応が出にくいのかかもしれない。

自己対応予測では、高群は主張的解決を選択し、低群は反社会的解決を選択する傾向がみられた。保護・依存関係得点は、兄・姉にとっては年少者に対する養育者の行動・態度を示すものと思われる。そのため、自己主張的対応が多くなるのかかもしれない。また、妹・弟には兄姉の行動を模倣する傾向があるため、主張的解決が多くなったのではないだろうか。逆に保護・依存関係得点が低い子どもは、社

表3 対応分析における結果のまとめ

	質問1 表情予測		質問2 自己対応予測		質問3 他者対応予測		質問4 結果予測	
	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群
保護・依存	悲しみ	怒り	主張的解決	反社会的解決	-	肯定的反応	悪い結果	関係促進
対立	悲しみ	怒り	主張的解決	-	肯定的反応	行為の続行	悪い結果	関係促進
共存	-	-	主張的解決 反社会的解決	消極的解決	行為の続行 停止	肯定的反応	悪い結果	関係促進

会的ルールの理解が乏しいのかもしれない。

他者対応予測では、低群のほうが肯定的反応や謝罪を示すと答えた。また結果予測でも、低群のほうが関係促進を選択し、高群のほうが、悪い結果に近かった。これは、例えば自分が年長者の場合、面倒を見ようとしても年少者が言うことを聞かないなどの経験からこのように予測したのかもしれない。年少者の場合は、面倒を見られる立場であるため、自分から能動的に他者の行動を予測することが難しいという可能性が考えられる。

**対立関係** 表情予測では、高群が悲しみを選択し、低群のほうが怒りを選択する傾向が見られた。保護・依存関係と同様の結果である。高群の方がけんかが多く、自分がきょうだいに被害を受けることが多いため、自分の経験の上から悲しみを選択したのかもしれない。

自己対応予測では、高群のほうが主張的解決を選択する人が多かった。低群は、消極的解決に近かった。対立関係が無い場合は主張的な対応を選択できない可能性がある。

他者対応予測では、高群は肯定的反応を示し、低群は行為の続行に近かった。対立的である方がよい反応を予測するという結果になった。いつも相手に肯定的反応を求める期待が高いため、現実ではけんかになってしまうということも考えられる。

結果予測では、高群が悪い結果に近く、低群が関係促進に近かった。普段もけんが多いため、けんかにつながると予測したのかもしれない。

**共存関係** 表情予測において高群、低群での差はあまりなかった。共存は、友達のような関係であるので特徴的な傾向が見られなかったのではないだろうか。

自己対応予測では、高群のほうが主張的解決や反社会的解決を選択し、低群のほうが消極的解決をする傾向がみられた。きょうだいとの共存関係はなんらかの積極的対応につな

がっているようである。

他者対応予測および結果予測において、低群は肯定的反応、関係促進、高群は行為の続行、悪い結果に近かった。きょうだい間の協調的關係および上下関係の無さが、被害場面での肯定的予測を困難にしているのかもしれない。

**きょうだい数** 表情予測では、きょうだい数が多いほど、喜びに近いという結果が見られた。喜びという回答は、ふざけて遊んでいるという解釈にもとづくと考えられる。また、きょうだい数が多い方が、自己対応予測では主張や反社会的解決に近く、他者対応予測では、肯定的反応に近い。一方、結果予測では、きょうだい数が多い方が悪い結果に近かった。

以上のことから、きょうだい数はきょうだい経験の豊富さを示しており、積極的な自己の対応と、結果の不確かさを認識しているのではないだろうか。また2人きょうだいより3人きょうだいの方がわからないという回答が少なかった点では、より多くのきょうだい経験をしていることが、認知の多様性・柔軟性に結びついていると言えるかもしれない。

なお一人っ子に関しては、人数が少なく、あまり特徴のある傾向をつかむことができなかった。きょうだいとのコミュニケーションの役割を比較する対象として、今後人数をそろえた上で再検討する必要があるだろう。

### 3. 総合考察

全体を通して見ると、きょうだい間の対立関係が仲間関係における攻撃的行動に結びつく、あるいは保護・依存関係や共存関係が仲間関係における向社会的行動と結びつくというような結果は全く見られなかった。きょうだい関係が、そのまま対人関係に影響しているわけではないようである。

表情予測と結果予測は、それぞれの高群、低群でほぼ同じ結果であったことから、これらはコミュニケーションの量に影響されると

いってもよいだろう。自己対応予測において、3つの関係性得点の高群が主張的解決を選択したことから、コミュニケーション量の影響がうかがわれる。どんな形であれ、きょうだいとのコミュニケーション量が多い方が主張のスキルを身につけているということであろう。他者対応予測では、コミュニケーションの質により違いが見られた。保護・依存関係の低群、対立関係の高群、共存関係の低群が、相手は肯定的反応を示すと予測した。簡単に解釈すると、仲の良いきょうだい関係の方が、仮説的場面における他者に対して悪い反応を示すと予測しているということになる。また、きょうだいとのけんかが多い子どもが、仲間関係においてもそのような反応を示すわけではないということも言えるであろう。

以上のことから、田中・山根(2004)が主張している通り、きょうだい数が社会性の発達に影響していることは、本研究でも確認できた。その一方で、本研究では主に他者の行動予測の面で、きょうだいとのコミュニケーションの質的側面の影響が見られた。

本研究では、3つの質的側面を独立に扱ってきた。しかし例えば、保護・依存関係得点も対立関係得点も同様に高い者もいれば、対立関係得点だけが低い者もいるはずである。また本研究では、きょうだい間のコミュニケーションの質と量だけに着目したため、きょうだいの年齢差や性別については検討できなかった。このような、きょうだい関係の多様性、あるいは関連する要因の多さが、きょうだい関係の研究の展開を妨げているといえるだろう。しかしながら、少子化が進む中、昔のように近所の子どもと遊ぶという経験が減ってきているのは想像にかたくない。そのような時、きょうだいという一番身近な遊び相手を得るということは、子どもにとっても大きな影響を及ぼすことは間違いないだろう。

## 引用文献

- Berndt, T.J. & Bulleit, T.N. 1985 Effects of sibling relationships on preschoolers' behavior at home and at school. *Child Development*, 21, 761-767.
- Dunn, J. 1986 Growing up in a family world, issue in the study of social development in young children. In M. Richards & P. Light (Eds.) *Children of social worlds*. Polity Press.
- Dunn, J. & Munn, P. 1986 Siblings and the development of prosocial behavior. *International Journal of Behavior Development*, 9, 265-284.
- Dunn, J. & Kendrick, C. 1982 *Sibling: Love, envy, and understanding*. Harvard University Press.
- 飯野 晴美 1994 きょうだい関係スケール 明治学院論集, 541, p89~109.
- Light, P. 1979 *The development of social sensitivity*. Cambridge University Press.
- Mischel, W. 1984 Convergences and challenges in the search for consistency. *American Psychologist*, 39, 351-364.
- Pepler, D., Corter, C. & Abramovitch, R. 1982a Social relations among children: Siblings and peers. In K. Rubin & H. Ross (Eds.) *Peer relationships and social skills in childhood*. Springer-Verlag.
- Pepler, D., Corter C. & Abramovitch, R. 1982b Social relations among children: Comparison of sibling and peer interaction. In K. Rubin & H. Ross (Eds.) *Peer relationships and social skills in childhood*. Springer-Verlag.
- 柴田 利男 1998 幼児の社会的コンピテンスに関連する社会的認知の要因 北星学園大学社会福祉学部北星論集, 35, 19-39.
- Stewart, R.B. 1983 Sibling attachment relationships. *Developmental Psychology*, 19, 192-199.
- 田中洋・山根涼子 2005 幼児期における社会的コンピテンスの研究 大分大学福祉科学部研究紀要, 27, 85~94.
- 依田 明 1990 きょうだいの研究 東京:大日本図書

## 謝辞

本研究の面接調査は、北星学園大学社会福祉学部福祉心理学科2007年度卒業生、吉田友美さんの卒業研究の一環として行われました。吉田さん、ならびにご協力いただいた北野しらかば幼稚園の先生・園児のみなさまに心より感謝申し上げます。

[Abstract]

## Effects of Sibling Relationships on Preschoolers' Social-Cognitive Competence

Toshio SHIBATA

This study investigated the effects of the quantity and quality of sibling relationships (protective-dependent, conflicting and friendly relationships) on preschoolers' social-cognitive competence. Sixty-three young children were interviewed to reveal the number of siblings, their sibling relationships and the social-cognitive patterns in their interpersonal conflict situations. Children's responses were analyzed by using correspondence analysis. The results showed that the number of siblings and the quantity of interpersonal behavior with siblings were related to their social-cognitive competences (cognition of others' emotions, social problem solving patterns and outcome predictions). The quality of sibling relationships was related to their prediction of others' behaviors. Effects of sibling relationships on their social-cognitive development are discussed based on these results.

---

Key words : Sibling Relationships, Social-Cognitive Competence, Preschoolers